「昔物語」考

――『源氏物語』の表現手法――

藤井　由紀子

はじめに

「昔物語」ということばがある。

「いといみじきことかな。今ははふれ失せにけんとこそ見しか。かうなるまで見ざりけることよ」とて、うち泣かれぬ。この子もいかに思ふにかあらん、うちうつぶして泣きゐたり。見る人もあはれに、昔物語のやうなれば、みな泣きぬ。（一八一頁）

『蜻蛉日記』下巻・養女迎えの場面、ここに、その初出例が見える。思いがけない再会に感涙する兼家と娘の様子が「昔物語のやう」であると記されており、物語性の強いと言われる下巻の中でも、最も端的にその傾向が表れている箇所として位置づけられてきた。

この『蜻蛉日記』の例に見られるように、日記や随筆と呼ばれるジャンルの作品において、「昔物語」と現実が重ね合わせられるのは、現実とは思われないほどの感動がそこにあったことを強調するためであると見て間違いないだろう。物語とは「世におほかるそらごと」（『蜻蛉日記』上・三九頁）であり、「いみじう口にまかせて言ひたる」（『枕草子』一七七段・三〇九頁）ものであるにもかかわらず、今、目の前にある現実が、それと同じようだ、違うところがないというのは、すなわち、現実が物語を凌駕していく瞬間をも捉えている表現であると言える。

では、それが、作り物語の中で用いられるとき、そこにはどのような意味を見いだせばよいのであろうか。「昔物語の

やう」であるとされるその現実もまた、虚構の物語でしかありえない。この、一種のパラドックスとも言える表現の意図を、本稿では考察してみたい。

一 「昔物語」の定義（一）

まず、「昔物語」の語義から確認していくこととする。『日本国語大辞典』には、次のように定義される。

①昔、作られた物語。昔から伝わる物語・伝説など。
②昔あったことについての物語。懐旧談。

①と②の違いは、「作られた物語」／「あったことについての物語」という表現に明らかな通り、ひとつの物語として形成されている[1]ものを指すか、事実として存在していたものを指すかという点にあると言えよう。②は、自身の体験の範囲内に属するものとして語られることが多いため、「懐旧談」という訳が生まれてくると考えられる。

この「昔物語」ということばについては、既に、諸氏によって検討が行われている[2]。「昔物語」とは、実質どのような物語を指しているのか、またそれがどのように享受されていたのかという点についても議論がなされており、当然のごとく、右の定義に従えば、①の意で用いられている用例が取り上げられてきた。実際、①と②の区別は、それほど難しくないように思われる。

・「年ごろは対面なくてなりもてゆくもあはれに思うたまへつるを」とて、昔物語などするほどに、……
（『落窪物語』巻三・一八七頁）

・その夜、上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも、恋しく思ひ出できこえたまひて、……（『源氏物語』須磨・一九四頁）

右の二例は、『日本国語大辞典』が②の用例として挙げるものである。一見してわかる通り、「昔物語」が懐旧談の意で使われる場合には、「す」を伴って動詞化することが多い。逆に言えば、何か具体的な作品を暗示する場合には、動詞化することはありえない。

しかし、では、このような文法的な違いによって、①と②がすべて厳密に区別できるかと言えば、事はそれほど単純ではないようだ。たとえば、次の『源氏物語』総角巻の例。

ほのかに人の言ふを聞けば、男といふものは、そら言をこそいとよくすなれ。思はぬ人を思ふ顔にとりなす言の葉多かるものと、この人数ならぬ女ばらの、昔物語に言

ふを、……　（二八八頁）

男は心にもないことを口にするものだという女房たちの「昔物語」を、大君が思い出しているくだりである。この「昔物語」は、②の意で解釈するのが穏当だと考えられるが、ただ、女房たちが自分が実際に体験したことを思い出話として語っているのか、あるいは、作り物語や昔話などの類の「昔物語を例にして語っていた」[3]のかは必ずしも明確ではなく、①の意にも取れなくはない。また、次の『浜松中納言物語』の例。

このへんの受領などありければ、をかしきほどに遊びて、夜の更けゆくままに、昔物語聞きどころあり、をかしく、わりなき御心なぐさむばかり申しなどすれば、……

（巻二・一四三頁）

帰国した中納言が、大弐に歓待される場面である。新編日本古典文学全集が、「このへんの受領」が語る「昔物語」に、「単なる懐旧談ではなく、土地に伝わる説話などであろう」という注をわざわざ付すのは、この文脈のみでは、①②いずれの意味にも取ることができるからに違いない。

このような用例を見ていくと、〈作られた／あった〉という意味の対立のみでこのことばを捉えるのは、必ずしも正確ではないように思われる。そもそも、「昔物語」ということばは、広く、説話というジャンルまでも包含するものであり[4]、だとすれば、①と②の境目は、非常に曖昧なものであって然るべきであると言える。

今、作り物語における「昔物語」の用例を検討するにあたって、それでもなお、①と②の区別をつけるためには、いかなる補助線を引けばよいのであろうか。『源氏物語』からもう一例挙げてみる。

古昔のことをも見知りて、ものきたなからず、よしづきたる事もまじれれば、昔物語などせさせて聞きたまふに、すこしつれづれの紛れなり。　（明石・一二八頁）

明石入道の「昔物語」を聞いて、無聊を慰める光源氏の様子が描かれるくだりである。この「昔物語」は、動詞「す」を伴っていることや、つづくくだりで、「世の古事どもくづし出でて」（一二八頁）と言い換えられていることから、明らかに、過去の出来事を語っていることがわかるものであり、懐旧談の意に取って、異論は出ないものであろう。

ただ、ここで注意したいのは、場面設定だけを見るならば、この明石入道の「昔物語」は、先の『浜松中納言物語』の受領の「昔物語」と、極めて類似しているという点である。地

方の受領が、都の貴族の相手をするために語る「昔物語」であるという点は共通しているにもかかわらず、なぜ、我々は、明石入道の「昔物語」は②の意で取り、受領の「昔物語」は①の意で取りたくなるのか。

それは、明石入道の過去が、物語世界において既に明らかにされているものだからであろう。ここで入道の語る「昔物語」の「昔」が、かつて宮中に近衛中将として仕えていた時代を指すであろうことは、想像するに容易い。対して、総角巻や『浜松中納言物語』の用例の意味が揺れるのは、「昔物語」を語る主体が、「人数ならぬ女ばら」や「このへんの受領」という、その場限りの登場人物で、過去を共有することができないからだと考えられる。

だとすれば、作り物語における「昔物語」には、やはり、二つの種類があることが見えてくる。それは、「昔」という時間の概念に起因する。ひとつは、物語内の時間を遡ればたどり着くことのできる「昔」の「物語」、もうひとつは、物語内の時間を遡っても、明確にはたどり着くことのできない「昔」の「物語」である。先に辿り見た通り、②の意で解釈できる「昔物語」は、基本的に、前者の時間概念を持つものであると捉えるべきであろう。正確に言い直せば、前者の時間概念を持つからこそ、②の意であることが確定できるということになる。それに対して、①の意の「昔物語」は、物語内の時間だけでは説明のつかない「昔」を指していると考えられる。次節において、詳しく見ていくこととしたい。

なお、先行研究においては、「昔物語」と「物語」の違いについても議論がなされてきたが、本稿では、「物語」についてはひとまず置き、「昔物語」の用例についてのみ検討することとする。両語は意味的に重なり合う場合も多いと考えられるが、「昔」ということばに注目するならば、別の意義を持つものとして認識すべきだと考えるからである。同様の理由から、「昔の物語」は、考察対象に加えることとする。

二 「昔物語」の定義（二）

『源氏物語』以前の作り物語に、「昔物語」の用例は少ない。『竹取物語』『うつほ物語』にはなく、『落窪物語』にわずか二例を見いだすのみである。『落窪物語』の二例は、先に用例を挙げた通り、登場人物が、物語内の時間を過去に遡って思い出話をしている場面に用いられており、明らかに、懐旧談の意で用いられている。

『源氏物語』には、「昔物語」三十三例、「昔の物語」二例が見いだせる。[5] うち、懐旧談として捉えることができるものが十七例。残り十八例を対象として、その語義を再検討していきたい。

a例の、うらもなきものから、いとものの思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきをながめて、虫の音に競へる気色、昔物語めきておぼえはべりし。（帚木・一五八頁）

bただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えて、ふと消え失せぬ。昔の物語などにこそかかる事は聞け、といとめづらかにむくつけけれど、……（夕顔・二四一頁）

cいといたう荒れわたりて、さびしき所に、さばかりの人の、古めかしう、ところせく、かしづきすゑたりけむなごりなく、いかに思ほし残すことなからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなる事どもありけれなど、思ひつづけても、……（末摘花・三四三頁）

d昔に変らぬ御しつらひのさまなど、忍ぶ草にやつれたる上の見るめよりは、みやびかに見ゆるを、昔物語に、たふこぼちたる人もありけるを思しあはするに、同じさまにて年ふりにけるもあはれなり。（蓬生・三四一頁）

『源氏物語』を桐壺巻から読み進めるとき、早い段階で見いだすことのできる、形成された物語を表す「昔物語」「昔の物語」の用例である。[6] たとえば、bの「昔の物語」に、古注以来、源融の河原院説話が透かし見られてきたことを思い起こすまでもなく、これらの「昔物語」ということばが連想させるのは、現実世界で語り継がれ、読み継がれていた物語であることは明白であろう。dの「昔物語」に言う「たふこぼちたる人」の話は、物語内で語られたわけではない。まがうことない現実の世の中で語られているものであった。

すなわち、これらの「昔物語」が意味するのは、実在する「昔物語」なのである。至極当然のことを、ここで改めて述べるのは、それらが、『源氏物語』の〈外〉から来るものであり、「昔」という時間もまた、現実の時間軸に置かれるべきものであることを確認したいためである。懐旧談としての「昔物語」が、物語〈内〉の時間軸に置かれるのに対して、形成された物語を表す「昔物語」は、物語〈外〉の時間軸にその根幹を置いている。これこそが、両者の決定的な違いであった。

さらに確認しておきたいのは、物語の〈外〉から来る「昔物語」が、いったい何を指し示しているのかという点である。

e鬼や食ひつらん、狐めくものやとりもて去ぬらん、いと昔物語のあやしきものの事のたとひにか、さやうなることも言ふなりし、と思ひ出づ。（蜻蛉・一九八頁）

fこの人も、亡くなりたまへるさまながら、さすがに息は通ひておはしければ、昔物語に、魂殿に置きたりけむ人のたとひを思ひ出でて、……（夢浮橋・三二六二頁）

従来、これらの「昔物語」には、物語享受史の俎上で、散逸物語や口承説話などが推測され、あてはめられてきた。それはひとえに、「昔」ということばが現実の時間を指し示すからに他ならない。しかしながら、今、改めてながめ直すと、これらは、必ずしも、何かひとつの物語を明確に想起させるものではないことに気づかされる。

先に見たdの「たふこぼちたる人」の話と同じように、比較的具体化された形で「昔物語」の内容が示されるものとして、「魂殿に置きたりけむ人」の話が記されるfが挙げられる。しかし、注意したいのは、そのような場合であっても、それが、ひとつの「たとひ」であると示されているという点である。「魂殿に置きたりけむ人のたとひ」は、広く類話を想起させつつ、唯一の物語を指し示すものではない。eの用例においても同様で、「鬼や食ひつらん、狐めくものやとりもて去ぬらん」と、その内容はある程度暗示されはするものの、しかし、「あやしきものの事のたとひ」でしかないことが記されている。「昔物語」は、決して、何かひとつの物語を限定的に指すことばではないのである。この非限定性は、たとえば、次のような用例と比較することによって、より鮮明なものとなるだろう。

古りにたる御厨子開けて、唐守、藐姑射の刀自、かぐや姫の物語の絵に描きたるをぞ、時々のまさぐりものにしたまふ。（蓬生・二三一頁）

ここで確認できる「唐守」「藐姑射の刀自」「かぐや姫の物語」[7]という物語は、それらが「古りにたる御厨子」から取り出されたということからもわかる通り、たしかに「昔物語」の範疇に入るべきものであると考えられる。しかし、だからといって、「かぐや姫の昔物語」などという呼び方はされない。物語名が明示される場合には、「昔物語」ということばは用いられないのである。「かぐや姫」の「物語」と限定された時点で、それは、「昔」の「物語」とは、異質なものであると考えるべきであろう。つまり、「昔物語」とは、「かぐや姫の物語」や「在五が物語」（総角・二九四頁）などという唯一の作品を指す表現に対して、はっきりと限定されない、

何かしらの「物語」を指すことばなのであって、その茫漠とした広がりが「昔」ということばに集約されていると捉えるべきなのである。

今、これまでに確認してきたことを整理し、『日本国語大辞典』に言う①の「昔物語」の定義を補足するとすれば、「現実に存在することは暗示されながらも、ひとつに限定されることのない物語」ということになろう。これは、『源氏物語』の用例に対してのみあてはまるものではなく、冒頭に挙げた『蜻蛉日記』の用例にも適用できるものと思われる。ひどく曖昧な定義ではあるが、おそらくは、その曖昧さにこそ、「昔物語」ということばの持つ特質があるはずである。次節から、その表現の意図について、考察を及ぼしていきたい。

三　「昔物語」という表現

前節で見たa～fの用例は、いずれも、『源氏物語』の作中世界と、「昔物語」の作中世界を重ね合わせるために用いられているものであった。再確認しておくならば、aは、夕顔が嘆く様子を「昔物語め」くと述べるもの、bは、「なにがしの院」で「いとをかしげなる女」が枕元に見えたことを「昔の物語」に擬えたもの、cは、心細い状態で暮らす末摘花の状態を「昔物語」に重ねたもの、dは、末摘花の屋敷の様子に「昔物語」を思い合わせたもの、つづく二例は宇治十帖からの用例で、eは、浮舟失踪の要因を「昔物語」の中に探ろうとするもの、fは、瀕死の浮舟の様子を「昔物語」の登場人物にたとえるもの、となっている。

極めて単純にその表現の意図を考えるならば、それは、二つの物語を重ね合わせることによって、多層化したイメージを形成することを目指したものということになろう。「昔物語」という別の物語の内容を取り込むことで、『源氏物語』の物語世界には広がりが与えられると、ひとまずは言えそうである。

ただし、物語と物語を重ね合わせるということは、それが所詮は物語でしかありえないという限界性の露呈に繋がっていくのもたしかである。『源氏物語』以降、中世の物語たちが、「光源氏の露分けけん蓬が門、思ひやられて悲しきに」（『あきぎり』上・一一頁）とか、「かの女三の宮の立ち姿、柏木の右衛門督、身をいたづらになしけるも、かくばかりにや」（『木幡の時雨』三五頁）などという表現によって『源氏

物語』の内容を取り込んだ結果、かえってその浅薄さを浮き上がらせてしまったことを思い合わせてもよい。先行の物語を取り込むということは、物語に典型的な骨格を露わにすることに繋がるだけではなく、その物語に規制されてしまう危険性をも孕んでいるのである。

『源氏物語』は、このような限界性・危険性に対して、非常に自覚的であったと考えられる。

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければ、いとにほひすくなし。（中略）唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、……　（一一一頁）

桐壺巻の、あまりにも有名なくだりである。ここで比較されている楊貴妃と桐壺更衣は、しかし、単純に重ね合わせられているわけではない。楊貴妃の美貌を前提として、桐壺更衣の「なつかしうらうたげ」であった美点が強調されているのであって、桐壺更衣が「楊貴妃のやう」であったとは言われないことに注意したい。あるいは、次の帚木巻の例。

さるは、いといたく世を憚り、まめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には、笑はれたまひけむかし。　（一一九頁）

語り手の前口上で、光源氏と比較される交野の少将もまた、真面目すぎる光源氏を揶揄するために持ち出されているのであり、光源氏が「交野の少将のやう」であるとは語られないのである。『源氏物語』は、特定の先行物語を示唆する場合には、周到に、直接的な重ね合わせを避けていることが見てとれる。[8]

では、このような意識がありつつも、なぜ、「昔物語」の場合には、むしろ積極的に重ね合わせが行われているのであろうか。ここで、「昔物語」に非限定性という特質があったことを思い出さねばなるまい。「昔物語」は、特定の物語を指し示すことばではなかった。そのような曖昧なことばには、そもそも規制されようがないのである。もちろん、「昔物語」にどのような物語を想定するかは、読み手に委ねられており、さまざまな物語がそこにあてはめられはするであろう。しかし、読み手が想定の根拠とするのは、他でもない、『源氏物語』の内容であり、「昔物語」ということばの置かれた文脈なのである。読み手は、『源氏物語』の当該場面にあてはまる「昔物語」を探すことになるのであって、むしろ、『源氏物語』が「昔物語」の内容を規制していくかのような、一種の逆転現象が起こるのである。『源氏物語』は「昔物語」に

束縛されることはない。

それだけではない。前節で見たa～fの「昔物語」は、実は、すべて、会話文もしくは心内文の中に置かれたものである。[9] すなわち、「昔物語」との重ね合わせを行っているのは、物語内の登場人物なのである。登場人物が、自らの経験した物語内の出来事を「昔物語」にたとえるのと同時に、読み手もまた、その「昔物語」に、実在する物語を重ね合わせるとすれば、その瞬間に、架空であるはずの登場人物は、現実の読み手と同じ「昔物語」の享受者となる。読み手の想定の上ではあるが、実在する「昔物語」が、物語内にも存在することになるのである。ここに、〈外〉の時間を示していたはずの「昔」が、物語〈内〉の「昔」と融合していく様相を見てとることができる。「昔物語」は、それ自体が〈外〉から持ち込まれるだけではなく、〈外〉の時間軸を〈内〉に持ち込んでいるのだと言える。そのことによって、『源氏物語』の時間は、現実性を与えられることにもなるのであった。

玉鬘十帖に至って、「昔物語」は、ついに実体化する。

gこの大臣の御心ばへのいとあり難きを、親と聞こゆとも、もとより見馴れたまはぬは、えかうしもこまやかならずやと、昔物語を見たまふにも、やうやう人のありさま、世の中のあるやうを見知りたまへば、……

（胡蝶・一七五頁）

h継母の腹きたなき昔物語も多かるを、心見えに心づきなしと思せば、いみじく選りつつなむ、書きととのへさせ、絵などにも描かせたまひける。

（蛍・二〇八頁）

この二例の「昔物語」は地の文に置かれている。gは、養父としての光源氏のありようを「昔物語」を基準として捉えているもの、hは、明石の姫君に与えるものとして、継子いじめの「昔物語」を避けようとするもので、先に見たような登場人物の心中での重ね合わせではなく、「見知り」「選り」と、登場人物によって実際にその内容が確認されていることが見てとれる。それは、実物としての「昔物語」を表しているのであって、読み手の思考の中で存在していた「昔物語」は、ここに具現化することとなる。つまり、「昔物語」の時間が、『源氏物語』の時間と、完全に重なり合うことを意味していよう。「昔物語」は、物語の〈内〉と〈外〉を繋ぐ、重要な楔となっていくのであった。[10]

このように見てくると、「昔物語」は、単なる物語同士の結合に用いられることばなどではなく、『源氏物語』が現実を装うために用いられている表現であることがわかる。それ

は、「宇多帝の御誡あれば」（桐壺・一一五頁）とか、「行平の中納言の、藻塩たれつつわびける家ゐ近きわたり」（須磨・一七九頁）などといった表現で、執拗に史実と連結しようとする姿勢と、その根幹は同じなのではないか。

iかやうのことは、限りなき帝の御いつきむすめも、おのづからあやまつ例、昔物語にもあめれど、けしきを知り伝ふる人、さるべき隙にてこそあらめ。（三八頁）

少女巻、夕霧と雲居雁の仲を嘆く乳母の台詞である。ここで、二人の仲と比較されている「限りなき帝の御いつきむすめも、おのづからあやまつ」話は、「例（ためし）」ということばで示されていることからわかる通り、思わぬ事態への対応策を考える際の、ひとつの先例として持ち出されている。それが、皇女の密通という、表向きの史実には語られにくいものであるがゆえに、史書や古記録ではなく、「昔物語」の中から引き出されているということは、裏を返せば、「昔物語」に史実と同じ価値が付与されていることの証左に他ならない。蛍巻の物語論を待つまでもなく、「昔物語」ということば自体に内在する現実性は、その表現手法の形成と発展の中で、自覚的に用いられるようになったものだと捉えたい。

以上、「昔物語」という表現について考察してきたことをまとめると、次のようになる。

「昔物語」は、そのほとんどが会話文・心内文の中で用いられ、先行物語を暗示させつつもそれに規制されない表現であり、なおかつ、物語〈外〉の時間を物語〈内〉に持ち込むことによって、現実を装う効果を持つことばである。

「昔物語のやう」であるとされる物語〈内〉の出来事は、決して、絵空事であることを誇張されるわけではない。むしろ、「昔」ということばの指し示す〈外〉の時間と交わることによって、現実性を獲得していたのであった。それは、「物語」という営みそのものに自覚的であった『源氏物語』であるからこそ見いだすことのできた表現手法であり、物語史におけるひとつの達成であったと位置づけたい。

四　『源氏物語』の時間意識

前節までに、「昔物語」の定義とその表現手法について考察してきた。『竹取物語』『落窪物語』には見られなかったその表現は、『源氏物語』の鋭敏な時間意識において発見されたものであった。そのような『源氏物語』の意識について、

別の角度から考察を加えておきたい。

先に見た通り、「昔物語」の用例は、ほとんどが会話文・心内文において用いられており、地の文で用いられる場合には、実物としての「昔物語」を表していた。その中で、次の用例は、例外的と言えるものである。

p親子の御仲と聞こゆる中にも、つゆ隔てずぞ思ひかはしたまへる。よその人は漏り聞けども親に隠すたぐひこそは昔物語にもあめれど、さはた思されず。（四〇一頁）

夕霧巻、夕霧に迫られた落葉の宮が、母一条御息所にそのことが人づてに伝わることを恐れる場面である。そこに置かれた落葉の宮と一条御息所の親子関係を説明するくだりに、「昔物語」ということばを見いだすことができる。

この「よその人は漏り聞けども親に隠すたぐひこそは昔物語にあめれ」という一文は、つづく「さはた思されず」の「さ」の内容を示しているものである。「思されず」の主語は落葉の宮であるが、しかし、「親に隠す」ことが念頭にないというのは、落葉の宮自身の心情として確実であるものの、彼女が実際に「昔物語」を想起していたかどうかはわからない。藤井日出子氏が、「異質であり、挿入の文である」[11]と述べられる通り、この一文は、落葉の宮の心中を、補足説明的に述べている文だということになろう。では、ここで、誰が「昔物語」を想起し、落葉の宮・夕霧の案件と重ね合わせたのかと言えば、物語の語り手であるとしか考えられない。助動詞「めり」が使われていることなどからも、この一文は、いわゆる草子地として捉えるべきものであると考えられるが、草子地における「昔物語」は、当然のことながら、重ね合わせを行う主体が物語の登場人物ではないという点において、これまでに見てきた用例とは異質である。

q着たまへる物どもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそまづ言ひためれ。（末摘花・三六七頁）

r昔物語にも、物得させたるをかしきことには数へつづけためれど、いとうるさくて、こちたき御仲らひのことどもはえぞ数へあへはべらぬや。（若菜上・九一頁）

qは、末摘花の衣装を細かく言い立てることを正当化するもの、rは、光源氏四十賀での贈り物について詳しく述べないことを正当化するものである。まったく逆の方向ではあるが、それぞれの叙述の仕方について、語り手が「昔物語」を持ち出して断りを述べているという点で共通する。この二例において、先のp以上に問題なのは、語り手が、「昔物語」

と『源氏物語』の叙述を比較しているという点にある。すなわち、「昔物語」と重ね合わせられているのは、『源氏物語』そのものなのである。こうなると、登場人物が、自らの体験した出来事を「昔物語」と重ね合わせていたa～oの用例とは、重ね合わせの主体も客体も異なるものとなってしまう。その表現の意図も、別に考え直さなければならないだろう。

従来、q・rの草子地に関しては、たとえば、高橋亨氏が、「〈作者〉は意図して「昔物語」の方法を批判し超えようとしている」[12]と述べられるように、「昔物語」から離脱していく物語創作の精神性の発露として説かれることが多かった。たしかに、先に確認した「昔物語」の定義を、q・rにもあてはめるならば、物語の〈外〉にある「昔物語」と『源氏物語』とは、まったく別のものである。既存の「昔物語」とは異なる叙述のあり方を模索する姿勢をそこに見てとることは可能であろう。しかし、「昔物語にも」の「も」が暗示しているのは、『源氏物語』「も」また「物語」であるという事実なのではないだろうか。「昔物語」ではこのように叙述される、だからこの物語＝『源氏物語』でもこう述べる／しかしこの物語＝『源氏物語』ではそう述べない、という主張は、『源氏物語』が〈物語〉であることの高らかな表明である。決して、「「物語」でさえないかのごとく」[13]語られているわけではないのである。

ここで、もう一度、「昔物語」の語義に立ち戻らなければならないだろう。語り手は、『源氏物語』もひとつの物語であることを露呈させた。しかし、それは、必ずしも『源氏物語』が〈物語（フィクション）〉であることの種明かしではない。今、ここで語られているのは、語り手が実際に見聞きした光源氏の〈物語〉なのである。それは、第一節で確認した語義で言えば、②にあたる「昔物語」ではないか。すなわち、『源氏物語』は、語り手という存在を置くことによって、総体として、懐旧談としての「昔物語」となるのである。そして、語り手は、自分の懐旧談を、古くから語り継がれ、読み継がれてきた「昔物語」と比較する。その「昔物語」が、前節までに見てきた通り、実存する物語を想起させるものだとすれば、語り手の位置もまた、現実の時間軸の上に置かれるものとなろう。語り手の「昔」は現実の時間を遡るものとなり、ひいては、『源氏物語』自体が現実世界と連結していくこととなるのである。

『源氏物語』は、語り手の存在する時間と、登場人物の存在する時間を峻別し、主体の違いを意識しながら、現実を装

う手段として「昔物語」を用いていることとなる。言い換えれば、q・rの語り手と現実の作者は重ならない。語り手は、「昔物語」としての『源氏物語』を構築するためのひとつの仕掛けにすぎないのである。

このような『源氏物語』の意識は、後代の物語における「昔物語」と比較することによって、より明確なものとなる。

平安後期物語においては、『浜松中納言物語』二例、『夜の寝覚』一例、『狭衣物語』五例[14]の「昔物語」が確認できる。うち、第一節で挙げた『浜松中納言物語』の一例以外は、すべて、形成された物語としての「昔物語」で、懐旧談と解せるものはない。『源氏物語』を屈折点として、「昔物語」の使用傾向が変化したことが如実にうかがわれる。その中で、『夜の寝覚』から用例を挙げてみたい。

まことにいみじくかなしとおぼしたるを、殿も、いみじくかひあり、いみじとおぼす。昔物語などの心地して、いとあはれなるに、とどめもやられたまはず。

（巻五・四七一頁）

寝覚の上の父入道が、石山の姫君と初めて対面する場面である。物語のひとつの山場を描くこの箇所に、「昔物語などの心地して」という表現を見いだすことができる。「心地」ということばから、心中での重ね合わせが行われていることは明白であり、一見すると、『源氏物語』の用例と変わらないようにも思われるのだが、しかし、この「心地」は、いったい誰の「心地」なのだろうか。

文脈に素直に考えれば、それは、直前の一文の主語である「殿」つまり男君の「心地」を述べたものと捉えるべきだろう。ただ、男君の心情は、二度くり返される「いみじ」ということばで既に強調されている。それを補足し、「とどめもやられたまはず」という状態を説明している文だとすれば、先に見た『源氏物語』pの例と同じく、挿入された語り手のことばだと捉えられなくはない。あるいは、この場面全体を「昔物語などの心地」と述べる評言のようにも捉えられるのではないか。そのように考えたくなるのは、この箇所が、冒頭に引いた『蜻蛉日記』の一節と「酷似している[15]」からである。該当箇所をもう一度挙げてみる。

この子もいかに思ふにかあらん、うちうつぶして泣きゐたり。見る人もあはれに、昔物語のやうなれば、みな泣きぬ。

（一八一頁）

『蜻蛉日記』が「昔物語のやう」とするのは、肉親の感動的な再会という、この場面そのものである。それは、「見る

人」という第三者的な主語に委ねられ、この場面を客観的に把捉する効果を生んでいるが、しかし、実際に、重ね合わせを行ったのは、作者その人であることは動かない。事実、「昔物語の心地」という表現は、日記文学において、好んで用いられていく。

・次の日聞けば、「はやこの暁、霊山にて世をそむきぬ」と聞くも、昔物語を聞く心地して、あはれさ限りなくおぼえて、……（『弁内侍日記』一七六頁）

・前なる槽に入る懸樋の水も凍り閉ぢつつ物悲しきに、向ひの山に薪樵る斧の音の聞こゆるも、昔物語の心地してあはれなるに、……（『とはずがたり』巻一・二四七頁）

これらの「心地」が作者の「心地」であることは言うまでもない。日記文学において、なかば類型化していく「昔物語の心地」という表現を、『夜の寝覚』は無自覚に取り込んだために、あたかも、一人称の語りのような印象を与えるものとなってしまっているのではないか。言い換えれば、『夜の寝覚』は、語り手の置かれた時間と、登場人物の置かれた時間を、明確に区別する意識に欠けるということになろう。それは、『源氏物語』の姿勢とは、まったく異なるものであると言ってよい。

あるいは、それは、無自覚なものなどではなく、意図的なものであったのだろうか。

人の世のさまざまなるを見聞きつもるに、なほ寝覚めの御仲らひばかり、浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな。（巻一・一五頁）

よく知られる『夜の寝覚』の冒頭部は、「人の世」という現実世界を想起させる語り出しで、物語全体が現実であることを装っている。そのような枠組みの中で、語り手の位置もまた、あえて日記文学と同じところに置かれているのかもしれない。だとすれば、それは、物語が現実を装うひとつの手段であり、『夜の寝覚』の達成であろう。しかし、その一方で、「昔物語」という存在、ひいては、このことばの持つ時間は、物語の〈外〉に置き去りになってしまう。物語世界と「昔物語」は、あくまで平行の関係にあるだけである。『源氏物語』という物語までをも「昔物語」に含んで対峙せざるをえなかった後代の物語は、それを取り込まないことでしか自立が果たせなかったとも言えようか。

とまれ、『源氏物語』が発見した「昔物語」という表現手法は、物語が物語と重ね合わせられることの矛盾を意識することによって獲得されたものであり、物語世界が現実である

という仮構を前提として用いられたものではなかった。物語がいかにして現実に近づくか、その模索の中で生み出された表現なのであって、その時間意識は、『源氏物語』によってしか具現化できないものであったのだった。

おわりに

以上、「昔物語」ということばをめぐって、物語と物語が重ね合わせられる表現の意図を、「昔」という時間に注目することによって論じてきた。

「今は昔」という語り出しを持たなかった『源氏物語』にとって、「昔」という時間は、本来的に〈外〉にあるものであったと言えよう。「昔物語」は、その時間を取り込むと同時に、物語が現実を装うひとつの表現手法ともなりえていた。それは、『源氏物語』が『蜻蛉日記』から受け継ぐと同時に、自身が日記ではなく物語であるという自覚によって作り上げられていった表現であったと言えよう。物語が物語として屹立していく様相さえも、そこには見いだすことができるように思われる。

本稿では、中世の作り物語までをも見通した、「昔物語」の表現史を辿るつもりであったが、前提を構築するのみで紙幅が尽きた。考察の至らなかった点も多く、別稿を期したい。

注

(1) ここでいう「形成」とは、作り物語のように作品として完成されていたということのみを指すわけではなく、ひとつのまとまりを持つ〈話〉として世に広く認知されていたという場合も含むものとする。

(2) 「昔物語」に関する先行研究は多く、それぞれに考察目的の違いもあるが、『源氏物語』の「昔物語」の語義に関する具体的な検討を含むものとして、以下の論稿が挙げられる。
中野幸一「『源氏物語』に見える「昔物語」――前期物語の性格――」(『物語文学論攷』教育出版センター　S46)
阿部秋生「物語・昔物語など」(『源氏物語の物語論』岩波書店　S60)
藤井日出子「『源氏物語』における「昔物語」――説話の名称をめぐって――」(『後藤重郎先生古稀記念国語国文学論集』和泉書院　H3)
伊井春樹「昔物語の当代性――源氏物語における物語批判――」(『物語の展開と和歌資料』風間書房　H15)

(3) 前掲注(2)伊井論文。傍点は稿者による。

(4) 「昔物語」ということばが説話を含むことについては、次の論稿を参照されたい。
高橋貢「昔物語・世の物語・雑事と説話」(『中古説話文学研究序説』桜楓社　S49)
なお、前掲(2)藤井論文は、『源氏物語』中の用例は、「「昔物語」に説話が含まれているというより、「昔物語」そ

のものが、説話をさしている」と結論づけている。

（5）「昔物語」と「昔の物語」は、本によっては入れ替わることがある。言い換えれば、このふたつのことばが置換可能であるということになろう。また、類義語として、「昔の御物語」九例、「昔今の物語」二例、「昔今の御物語」四例、「古物語」二例があるが、これらはすべて懐旧談の意で用いられている。「いにしへの物語」二例のうち、一例は、絵合巻で、具体的な作り物語を指すものとして使われており、「昔」と「いにしへ」の語感の違いも含め、検討の余地があると思われるが、用例数が少ないため、本稿では、考察の対象から外すこととする。なお、「古物語」については、以下の論稿参照。
今西祐一郎「「ふるものがたり」考」（『源氏物語覚書』岩波書店　H10）

（6）いわゆる玉鬘系の巻々に集中して見られることは興味深い。夙に、野村精一氏に、「これらの、一応文学ジャンルないし作品と見なしうべき〈昔物語〉の用語例を見るとき、帚木―夕顔―末摘花―蓬生―胡蝶―螢という諸巻に存るのに気付く」という指摘がある（「虚構の物語――物語批評の歴史・序説――」（『源氏物語の創造』桜楓社　S44）。

（7）今、ひとまず、一般的な解釈に従って、「唐守」「藐姑射の刀自」「かぐや姫の物語」という三作品名として区切ったが、「唐守」「藐姑射の刀自」「かぐや姫」という三作品名を「の物語」が受けていると取るべきなのかもしれない。

（8）物語名が明示されるものとして、他に、先に見た蓬生巻の「唐守」「藐姑射の刀自」「かぐや姫の物語」、絵合巻の「竹取の翁」「宇津保の俊蔭」（三七〇頁）、「伊勢物語」「正三位」（三七一頁）などがあるが、これらはいずれも物語絵として実物が鑑賞されることを述べる文脈にあって、重ね合わせとはなっていない。蛍巻には、玉鬘が、主計頭に迫られた「住吉の姫君」（二〇二頁）と、大夫監に求婚された自分を重ね合わせる場面と、紫の上が「くまのの物語」（二〇六頁）の絵を見て、自分の幼かった頃を思い出す場面があるが、いずれも、過去との重ね合わせであるため、規制という危険性は回避されている。蛍巻には、周知の通り、光源氏の物語論が置かれていて、その始発に、物語と現実を容易に混同する女性への批判があることから、意図的に先行物語が明示されている可能性が高いとも言える。次の二例はやや問題がある。

・在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの、「人の結ばん」と言ひたるを見て、いかが思すらん、すこし近く参り寄りたまひて、「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならはしてはべりけれ。いとうとうとしくのみもてなさせたまふこそ」と、忍びて聞こえたまへば、……　（総角・二九四頁）

・芹川の大将のとほ君の、女一の宮思ひかけたる秋の夕暮に、思ひわびて出でて行きたる絵をかしう描きたるを、いとよく思ひ寄せらるかし。　（蜻蛉・二四八頁）

一例目は、「在五が物語」の絵を見た匂宮が、その関係性に擬えて女一の宮に戯れる場面。二例目は、「芹川の大将」という物語の「とほ君」という登場人物の恋に、薫が自身の女一の宮思慕を「思ひ寄せ」る場面（「芹川」と「とほ君」を物語名とする説もある）。いずれも、先行物語の人物関係を、匂宮や薫が自分に置き換えていることから、直接的な重ね合わせが行われているものと見なされる。物語の「絵」を見て、そこに自身の現況を投影する手法は、宇治十帖に至って用いられるようになり、後代の物語にも好んで使われるものとなる。少なくとも、本文中に挙げた桐壺巻や帚木巻の傾向とは、

かなり異なることはたしかであり、宇治十帖特有の論理として、別に考える機会を持ちたい。なお、『源氏物語』全編を通して、物語名が明示される場合、ほとんどが「絵」として提示されていることも、「昔物語」との相違点である。

（9）厳密に言えば、**d**の「昔物語に、たふこぼちたる人もありける」は地の文であるが、動詞「思しあはする」がそれを受けていることから、光源氏の思考を表しているという意味で、心内文と同等のものと考える。

（10）蛍巻以降の「昔物語」の用例を列挙しておく。

j昔物語などを見るにも、世の常の心ざし深き親だに、時に移ろひ人に従へば、おろかにのみこそなりけれ。まして、型のやうにて、見る前にだになごりなき心は、懸り所ありてももてないたまはじ。（真木柱・三六四頁）

k昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、必ずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむ、と憎く推しはからるるを、げにあはれなるものの隈なりぬべき世なりけりと、心移りぬべし。（橋姫・一三二頁）

lかく、とり分きて人めかしなつけたまふめるに、うちとけて、うしろめたき心もやあらむ。昔物語にも、心もてやはとある事もかかる事もあめる。（総角・一三三四頁）

mこはいかにもてなしたまふぞと、夢のやうにあさましきに、後の世の例に言ひ出づる人もあらば、昔物語などに、ことさらにをこめきて作り出でたる物の譬にこそはなりぬべかめれ。（総角・二二五六頁）

nかかる道を、いかなれば浅からず人ｚｑの思ふらんと、昔物語などを見るにも、人の上にても、あやしく聞き思ひしはげにおろかなるまじきわざなりけり。（宿木・四〇一頁）

oあはれなりける事かな。いかなる人にかあらむ。世の中をうしとてぞ、さる所には隠れゐけむかし。昔物語の心地もするかな。（手習・二九九頁）

以上の六例は、「昔物語」と物語世界を重ね合わせているもので、先に見た**a**～**f**と、基本的には同じパターンで用いられている。会話文・心内文の中に置かれ、登場人物によって重ね合わせが行われているという点でも一貫している。ただし、「見る」「読むを聞く」などといった表現とともに用いられているのは、初期の用例にはなかった傾向で、玉鬘十帖での「昔物語」の実体化を踏まえた表現になっていることがうかがわれる。「昔物語」を用いた表現は、物語の展開とともに、成長していると言えるだろう。

（11）藤井日出子「『源氏物語』における『物語』について」（『中京国文学』10　H3・3）

（12）高橋亨「物語の〈語り〉と〈書く〉こと」（『源氏物語の対位法』東京大学出版会　S57）

（13）前掲注（12）論文。ただし、高橋氏は「物語」と「昔物語」を同義と見ているため、「物語」を用いた草子地もともに考察の対象とされており、**q**・**r**の用例のみを指して「『物語』でさえないかのごとく」と述べられているわけではない。氏の「昔物語」「物語」に対する見解は、次の論稿に詳しい。

高橋亨「物語論の発生としての源氏物語――物語史覚え書き（二）――」（『名古屋大学教養部紀要Ａ人文科学・社会科学』22　S53・3）

（14）五例中、次の箇所は、諸本により、異同の大きいところである。

いつぞやかかることのありしと思し出でたるは、いとあ

やしう「やくなきのばんさう」といひけん昔物語に、幼かりし折、なま老人の語りし心地して、いみじうをかしきに、……（巻三・四二頁）

「昔物語」を含む破線の部分を欠く本もあり、その場合、用例数は四となる。

（15）藤井日出子『『源氏物語』以後の「昔物語」と「物語」』（『国際関係学部紀要』（中部大学）9　H4・10）

※『源氏物語』の引用は、日本古典文学全集（小学館）によった。その他の作品の引用は、以下の通り。

・『蜻蛉日記』『落窪物語』……新日本古典文学大系（岩波書店）

・『枕草子』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』『弁内侍日記』『とはずがたり』……新編日本古典文学全集（小学館）

・『あきぎり』『木幡の時雨』……中世王朝物語全集（笠間書院）

なお、読解の便宜のため、表記を私に改めたところがある。

（ふじい・ゆきこ　清泉女子大学専任講師）